東井義雄の教育思想と教育実践の一考察（1）

広　岡　義　之

An Investigation on Yoshio Toi's Educational Thought and Educational Praxis (1)

Yoshiyuki HIROOKA

要　旨

東井義雄は，兵庫県否日本を代表する教師・教育実践者の一人であると言っても，おそらく否定する者はだれもいないであろう。東井義雄の真骨頂はなんといっても，膨大な出版物や執筆活動をさらに凌ぐすばらしい数々の教育実践がわれわれを魅了する点に存するように思われる。そこで，教育の混迷した現代社会の中で再度，どのような方向に力点を置いてわれわれ教育関係者は教育実践を進めばよいのかを考えるヒントの一助として，小論で東井義雄の教育思想と教育実践を掘り下げて学んでみたいと思うのである。それゆえ小論の構成は以下のようになる。第一に東井義雄の生涯を年譜の形で一瞥する。その際，他にない特徴として彼の主要著作が出版された年については原則としてもれなく著書を年譜に反映することにした。そしてその次に小論では東井義雄自身の教育人生において生じた考え方あるいは教育現実や教育実践を，原則として時系列で紹介することを試みる。その作業を経ることで，東井義雄の思想形成の源泉およびその変遷をいっそう明瞭に考察することができると筆者は考えたからである。

キーワード：東井義雄，いのちの教育，浄土真宗，独来独去無一随者，のどびこ事件

問題の所在

東井義雄は，兵庫県否日本を代表する教師・教育実践者の一人であると言っても，おそらく否定する者はだれもいないであろう。単著や共著等を含めても百余冊（公刊されているものに限ると著書47冊，共著を含む），さらには論文や実践記録等掲載雑誌を含めると九百余冊（公刊されているものに限ると論文・実践記録，214編）を残している[1]という点で極めて優れた思想家であり著述家であった。しかし東井義雄の真骨頂はなんといっても，それらの膨大な出版物や執筆活動をさらに凌ぐすばらしい数々の教育実践がわれわれを魅了する点に存するように思われる。そこで，混迷した現代社会の中で再び，どのような方向に力点を置いてわれわれ教育関係者は教育実践を進めばよいのかを考えるヒントの一助として，小論では東井義雄の教育思想と教育実践を掘り下げて学んでみたいと思うのである。

それゆえ小論の構成は以下のようになる。第一に東井義雄の生涯を年譜の形で一瞥する。その際，他にない特徴として彼の主要著作が出版された年

については原則としてもれなく著書を年譜に反映することにした。なぜなら東井義雄ほど，ある意味で波乱万丈の人生を歩んだ者はいないという点，さらには彼の教育思想ひいては著作がその波乱万丈の人生の歩みと多くの点で呼応して熟成され展開されているために，可能なかぎり時系列で彼の著書を提示しつつ教育思想や教育実践を考察することが東井義雄の思想を理解するうえで望ましいと筆者は考えたからである。それが小論の冒頭に東井義雄の詳細な年譜を掲げる理由である。そしてその次に小論では東井義雄自身の教育人生において生じた考え方あるいは教育現実や教育実践を，原則として時系列で紹介することを試みる。その作業を経ることで，東井義雄の思想形成の源泉およびその変遷をいっそう明瞭に考察することができると筆者は考えたからである。

第1章　東井義雄の生涯と系譜

ここでは，『東井義雄の生涯』（東井義雄遺徳顕彰会）[2]，山田邦男他編著，「東井義雄年譜」『ことばの花束』[3]，および菅原稔編集・解説，「付録：東井義雄略年譜・主要著作目録」，『現代国語教育論集成・東井義雄』[4]を主として参照しながら，東井義雄の教育的略歴を俯瞰することにより，東井義雄の教育活動の足跡全体をはじめに把捉しておきたい。なぜなら，そうすることによって東井義雄のそれぞれの時代の教育思想が，どのようにして形成されたかが明瞭に理解でき，さらに時系列的に彼の思想がいかに深まっていくことがわれわれに把握できるからである。

東井義雄の生涯と年譜　（年齢については，正確に誕生月の前後で変わるため，あくまでも「めやす」として記述している）

1912（明治45）年：（0歳）　東井義雄は，明治45年4月9日兵庫県出石郡合橋村（但東町）佐々木に建つ「浄土真宗本願寺派東光寺」の長男として生まれた。父は，義證，母は，はつ。3歳までは当時，父親が大谷本廟務めであったために京都で過ごすことになる。

1918（大正7）年：（6歳）　相田尋常小学校へ入学するが，その年に母はつと死別することになる。東井は仏教に背くような思想を追及した時期もあったが結局，母の愛情のゆえに仏教から離れることがなかったと述懐している。さらに27歳で父親が亡くなるまでの20年間に六つの葬式を出さなければならないほど，苦悩の人生を生きることになる。

1923（大正12）年：（11歳）　東井は小学校5年生で旧制中学校の入学資格試験に合格するものの，父の反対で断念せざるをえなかった。うどん箱を机として勉学に励んだが貧しさのために中学入学を結局あきらめた。財産としての山や田畑はあったものの，次々と人手に渡っていき，貧しさから抜け出せず，東井が小学校5年生のとき，父親が親類の借金の保証人となり，その責任で差し押さえというつらい経験をしている。こうした苦しい経験を経た東井はなんとか勉強して，人生の負のスパイラルから抜け出そうとがんばった。

1927（昭和2）年：（15歳）　学費が一番安く入学できるという理由で，姫路師範学校に進学を決定する。当時は師範学校という教員養成学校の授業料が一番安く，奨学金を獲得して教師になることができた。学生時代，勉学には秀でていたものの運動が大の苦手で様々なクラブを転々として最後にマラソン部に入部する。そこでの苦い体験から後年，有名な東井の言葉「亀は兎にはなれない。しかし，努力次第では日本一の亀にはなれる。」「一番より尊いビリだってある」が生まれた。

1928（昭和3）年：（16歳）　東井は漢文の宿題で，「独来独去（どくらいどつこ），無一随者（むいちずいしゃ）」（独り来り，独り去る，一人として随（したが）う者無し）の言葉と巡り合う。母を早くに亡くし，父もやがては亡くなってしまい，自分もいつかは一人になってしまうことのさびしさを感じ，この頃から心の遍歴が始まる。

1932（昭和7）年：（20歳）　兵庫県姫路師範学校を卒業し，4月豊岡市豊岡尋常高等小学校に教諭として勤務し，それ以来10年間在職した。彼の

前半生は先輩の影響もあり，「生活綴方教育」に情熱を注ぐようになる。しかし当時の日本は景気が極度に悪く，プロレタリア文学にも興味を持つようになる。そうした思想と関連して，仏教に対しても「貧民の立場に立っていない」と疑問を持つようになる。

1935（昭和10）年：（23歳）　「但馬国語人」に「綴方生活指導略図」を，また「綴方精神」に「現実からの発足」等の論文を発表し，綴方教育界で注目されるようになる。

1937（昭和12）年：（25歳）　理科学習の時間，教え子が「のどびこ」（口垂蓋）はどのような働きをするのかと質問されるが即座に返答できなかった。東井が家で調べたところ，その働きの重要性に衝撃を受け，生命の神秘さを実感し，われわれは生きているのではなく「生かされている」こと気づくことになる。

1938（昭和13）年：（26歳）　4月10日，加藤登美代と結婚する。同年，敬愛する父（義証62歳）が死去する。

1941（昭和16）年：（29歳）　父との死別の後に，長女の迪代（みち）の大病を親として経験して，「いのち」のただごとでなさに気づく。その経験を通して，さらに担任の子ども六十人の「いのち」のただごとでなさを認識する。さらに「生きている」ことのただごとでない深さ，尊さ，すばらしさにめざめ，「いのちの教育の探究者」へと東井の教育思想はさらに深化してゆくことになる。

1941（昭和16）年：（29歳）　「僕等の二千六百年史」を発表した。雑誌「日本の子供」（文昭社発行）に四回の連載で「国史に対する子どもたちの綴方」を発表したが，これまで社会に対して批判的であった東井の思想がおおきく変化し，生活綴方のメンバーたちを驚かした。

1942（昭和17）年：（30歳）　亡くなった父の寺院を継承するために，故郷の「合橋村立合橋国民学校に4月に転勤する。

1943（昭和18）年：（31歳）　「文芸春秋」5月号で「国史の礼拝」が，10月号で「学童の臣民感覚」が掲載される。

1944（昭和19）年：（32歳）　合橋村立唐川国民学校に転勤する。「僕等の二千六百年史」と「学童の臣民感覚」を合わせて，8月『学童の臣民感覚』としてまとめて，日本放送出版協会より刊行する。しかし戦時中の国家主義思想教育として戦後，厳しく批判された。

1945（昭和20）：（33歳）　8月15日太平洋戦争での敗戦を迎え，東井の苦悩の日々が始まる。

1947（昭和22）年：（35歳）　東井自身の小学校時代の母校である相田小学校に勤務するようになり，そこで14年間教師として務める。十年間，戦争責任の決意として，執筆活動を停止する。それと同時に生徒の親とともに農民の生き方を問い直す実践を始める。

1956（昭和31）年：（44歳）　7月『子どもはおかあさんに何を求めているか』（学習文庫）を出版する。

1957（昭和32）年：（45歳）　5月『村を育てる学力』（明治図書）を出版する。本書は，戦争責任として執筆を停止して10年が経ち，再び筆を持った戦後の主要作であり，不朽の名著と呼ばれた。農民の生き方を問い直す実践の記録である。

1958（昭和33）年：（46歳）　9月『学習のつまずきと学力』（明治図書）を出版する。

1959（昭和34）年：（47歳）　広島大学の「ペスタロッチー賞」を授賞する。受賞理由は，へき地で綴方教育を深く実践するとともに，『村を育てる学力』と『学習のつまずきと学力』に対して，優れた実践と理論を融合したことの功績による。また同年12月に病気休職中の校長の後を継いで，相田小学校の校長に推薦される。

1960（昭和35）年：（48歳）　4月『子どもを伸ばす条件』（明治図書）を出版する。特に本書に対して日本作文の会より「第八回小砂丘忠賞」を授賞する。

1961（昭和36）年：（49歳）　但東町立高橋中学校校長となる。5月『授業の研究』（明治図書）を出版する。

1962（昭和37）年：（50歳）　地域の教育文化に貢献したという功績に対して，神戸新聞社より，

「平和文化賞」が与えられる。9月『国語授業の探究』（明治図書）を出版する。

1964（昭和39）年：（52歳）　八鹿町立八鹿小学校校長になる。この頃から東井の教育実践が注目され始め，全国から学校参観者が訪問するようになる。八鹿小学校での8年間が，もっとも教育者として充実した時期となる。後年，出版される東井義雄著作集別巻の『培其根』（ばいきこん）は，この時代に校長として，教職員を指導した記録集である。4月『中学生を持つ親へ』（明治図書）を出版する。

1966（昭和41）年：（54歳）　教員への指導をガリ版刷りで記録した『培其根』創刊～4号の発行が始まる。5月『主体性を育てる教育』（明治図書）を出版する。

1967（昭和42）年：（55歳）　2月『通信簿の改造－教育正常化の実践的展開』（明治図書）を出版する。この頃の教育信条に「一番より尊いビリだってある」「どの子も子どもは星」がある。「一番より尊いビリだってある」は，東井が師範学校時代，自らの体験から得た教育信条である。「どの子も子どもは星」は東井が55年間の教育生涯の中で最も大切にした信条で，同名の詩（『東井義雄詩集』所収）も有名である。同年，兵庫県知事から「教育功労賞」，学習研究社より「学研教育賞」を受賞する。『培其根』5号～15号を発行。

1968（昭和43）年：（56歳）　NHKラジオ「人生読本」に出演する。12月23日「いのちといのちとのであい」，24日「左手と右手」，25日「空のてんじょう」。三日間の放送で大きな反響があった。

1970（昭和45）年：（57歳）　『子どものつぶやき』（柏樹社）を出版する。

1971（昭和46）年：（59歳）　文部省から「教育功労賞」が授与される。『培其根』43号～50号の発行が始まる。

1972（昭和47）年：（60歳）　3月に40年間の教職生活を終了し，定年退職を迎える。同年3月，これまでの著作，論文，実践記録をまとめあげ，全十巻のうち『東井義雄著作集　1～6』（明治図書）を出版する。12月『子どもを活かす力』（柏樹社）を出版する。『培其根』51号を発行し，すべて完成する。

1973（昭和48）年：（61歳）　退職後一年間は，八鹿町社会教育指導員となる。その後，姫路女子短期大学講師，続いて兵庫教育大学大学院非常勤講師などを歴任する。本格的な講演活動（多い年は年間300回を超えた）を開始し日本中を訪問した。『東井義雄著作集　7』（明治図書）を出版する。

1976（昭和51）年：（64歳）　『東井義雄著作集・別巻1～3』（明治図書）を出版する。12月『授業技術入門』を出版する。12月『根を養えば樹は自ら育つ』（柏樹社）を出版する。

1977（昭和52）年：（65歳）　8月『いのちとのであい』（難波別院）を出版する。12月復刻版『培其根』全6巻（実践の家）を出版する。「培其根」が昭和52年に復刻されたのは，現場教師の熱い要望があってのことである。そもそもこの内容は，八鹿小学校時代に東井校長が教員に対する指導の記録としてガリバン刷りしたものを，そのままの形で復刻されたものである。ここに実践家としての東井義雄の面目躍如がみられる。まさに「教育の金字塔」と呼ばれる程に，高く評価される内容のものである。

1979（昭和54）年：（67歳）　4月『仏さまの願いとお母さん』（難波別院）を出版する。4月『子どもの何を知っているか』（明治図書）を出版する。6月『いのちの芽を育てる』（柏樹社）を出版する。

1981（昭和56）年：（69歳）　但東町から「教育特別功労賞」を受賞する。

1982（昭和57）年：（70歳）　内閣総理大臣より，叙勲「勲五等双光旭日賞」を受賞する。

1983（昭和58）年：（71歳）　2月『どの子も必ず救われる』（明治図書）を出版する。4月『子どもこそおとなの父』（法蔵館）を出版する。

1984（昭和59）年：（72歳）　5月『家にこころの灯を』（探究社）を出版する。10月『若い教師への手紙1　教師の仕事・仕事の心』（明治図書）を出版する。

1986（昭和61）年：（74歳）　兵庫教育大学大学院の非常勤講師となる。2月『拝まない者も　おがまれている』（光雲社，発売は星雲社）を出版する。3月『若い教師への手紙2　子どもを見る目・活かす知恵』（明治図書）を出版する。7月『若い教師への手紙3　いま，教師が問われていること』（明治図書）を出版する。10月『いのちの根を育てる学力』（国土社）を出版する。月不明『母のいのち子のいのち』（探究社）を出版する。

1987（昭和62）年：（75歳）　姫路学院女子短期大学，兵庫教育大学大学院の両講師を辞し，すべての教職生活を終える。この頃から身体の体調を崩すことが多くなる。検査入院で胃がんと診断され，豊岡病院で手術を受け，胃部のほとんどを切除する。10月『ひかりといのち』（探究社）を出版する。

1988（昭和63）年：（76歳）　全国青少年教化協議会より，正力松太郎賞を受賞する。12月『輝くいのち輝く子ども』（探究社）を出版する。

1989（平成元）年：（77歳）　10月『東井義雄詩集』（探究社）を出版する。10月『大いなる願いの中の私』（宣協社）を出版する。

1990（平成2）年：（78歳）　2月『老いよ，ありがとう』（樹心社）を出版する。3月，小学校教諭として勤務していた長男の義臣が授業中に倒れ，意識不明となる。4月『喜びの種をまこう』（柏樹社）を出版する。12月9日放映のNHK総合テレビ「心の時代」に出演する。「仏の声を聞く」と題して全国放送。この時の放送内容が，平成3年『仏の声を聞く』として出版され，これが遺著となる。

1991（平成3）年：（79歳）　4月14日朝，自転車で手紙を投函しに行く途中で，自動車と接触し，意識不明のまま豊岡病院に入院。18日午前零時4分逝去。死因は急性硬膜下血腫。79年の生涯を閉じる。内閣総理大臣より叙勲，従五位に叙せられる。6月『仏の声を聞く』（柏樹社）を出版する。

1992（平成4）年：　4月『東井義雄「いのち」の教え』（佼成出版社）を出版する。

1994（平成6）年：　6月『おかげさまのどまんなか』（佼成出版社）を出版する。兵庫県出石郡但東町に「東井義雄記念館」が開館する。

第2章　東井義雄の教育思想の形成とその変遷

第1節　東井義雄の生涯と教育思想

ここでははじめに主として朝日新聞社編「現代人物事典」に即しつつ，東井義雄の主たる生涯と教育」思想を一瞥してみよう。東井は，1912（明治45）年4月9日，兵庫県出石郡但東町の浄土真宗の寺に生まれた。1932（昭和7）年に姫路師範を卒業し兵庫県下の小学校教師となり，野村芳兵衛，小砂丘忠義らに見出されて戦前の「綴方運動」に加わる。マルクス主義の思想にふれて，子どもたちの生活の貧困が社会階級的矛盾としてとらえなければならいことを認識しながらも，そこからの救済を真宗の他力本願的「いのちの思想」への沈潜に求めた。戦時下の1944（昭和19）年には『学童の臣民感覚』と題する著作を刊行し，理論や思想以前の日常感覚に「民族のいのち」を認めようとした。[5)]

太平洋戦争後，東井は教師として戦中の執筆活動の戦争責任を考えて，教職引退も思いめぐらすものの，結果的に10年間，僻村の小学校で教育の仕事に集中し，これまで積極的に展開していた社会的発言等を封印した。1957（昭和32）年，戦後初の本格的著作『村を育てる学力』を発表。この著作は，戦後教育の転換点でもあり，教育界に強烈な衝撃を与えた。東井はここで公教育が成り立たせている「教科の論理」に対して，子どもが実生活で身につけたものの感じ方，考え方，行動の仕方を「生活の論理」とよび，後者に立脚した教育実践の展開を志向した。そうした立場から1950年代の後半期に『学力をのばす論理』（1957年），『学習のつまずきと学力』（1958年），『授業の探求』（1961年）などの著作を矢継ぎ早に世に問い始めた。[6)]

しかし1960年代おける高度経済成長は東井が育てたいと願った「村」を崩壊へと導き，したがっ

て東井の教育は「村」の教育に対する鎮魂の営為ともなった。東井義雄の授業実践の追求に関しては，きわめて質の高いものを創造していった。1972（昭和47）年，兵庫県養父郡八鹿小学校長を最後の職として第一線からしりぞくものの，生家である寺を村の文化センターとして社会教育活動を拡大した。また全国からの講演会依頼を受けて全国を巡回したり，旺盛な執筆活動を晩年まで継続した。[7]

次に菅原稔の見解に従いつつ，東井義雄の教育実践家としての側面から思想的内容の特徴をまとめてみよう。菅原稔は，東井義雄の教育実践家としての特徴を以下の3点にまとめている。第一に東井は「生きていることのただごとでなさ」「いのち」の自覚に基づき，その存在そのものである「いのち」の現れである児童生徒の存在を重視した。つまり東井は彼らを代替不可能なものとして捉えようとしている。第二に東井は「書く」ことを中心とし，その機能を十分に生かしながら，学習内容を児童生徒の生活上の問題と関連させ，自分の問題として捉える，児童生徒の内面活動を重視した。第三に東井は，学習主体の確立と集団の中での解放が図られた上で展開され，その意味でも学習の結果だけではなく，学習過程をも重視した。[8]

第2節　東井義雄の思想的基盤についての特徴

次に古家佳美の研究[9]にしたがって，東井義雄の思想的基盤についての特徴を簡単に振り返っておきたい。東井義雄は，1912（明治45）年4月9日，兵庫県出石郡合橋村（但東町）佐々木（現在豊岡市但東町佐々木）に建つ「浄土真宗本願寺派東光寺」の長男として生まれた。姫路師範を卒業した後，豊岡尋常高等小学校，但東町内の小・中学校で教師として勤務し，八鹿小学校で定年を迎えた。その後，姫路学院女子短期大学，兵庫教育大学大学院の非常勤講師を務め，1991（平成3）年に79歳で逝去。東井義雄は生前に100冊以上の著作，多数の論文を執筆しただけでなく，晩年には全国で何百回という講演に招かれた。教育実践家としては，地域と一体となった学校運営や綴り方指導が顕著な業績と言えるだろう。[10]

古家佳美の研究にしたがえば，東井義雄の生涯は三つに区分できるという。第一期は，誕生から学生時代までである。経済的に困窮の極みにあり，教育の重要性を実感しながら，自分の進路を決定せざるをえなかった時期である。第二期は教職についてから退職までの時期で，ここで東井義雄は様々な教育実践を展開していき，社会から高い評価を受けていく時期である。第三期は，教職を退いてから亡くなるまでの時期で，大学で非常勤講師を務めながら，全国で講演活動を活発に行なった時期である。

第一期：誕生から学生時代まで

東井義雄の家が貧しかったために，進路にかなりの制約がかかり，自分の将来を真剣に考えていた時期である。人間としての生き方をいやがうえにも問われざるを得ず，母への思いも重なり，仏教信仰と直面していくことになる。[11]

第二期：前期（教師出発の時期）・中期（戦争協力に対する批判に耐える時期）・後期（戦後，教育実践が高く評価される時期）

前期は，教師となって現実の厳しさと直面して一時期，無神論の精神状態となり宗教から距離をとることとなる。しかし絶対的存在であった母への思いが東井義雄の精神の危機的状況を救うことになる。また教え子から「生の神秘さ」を気づかされ，「生きていること」から「生かされていること」への変貌がみられる。父との死別，子どもの大病に直面するなかで「いのちのただごとでなさ」に覚醒する。中期は，戦争に協力した教育活動をしたと批判され，終戦後，転向教師と非難されても沈黙を貫き，10年間筆をとらなかった。人間として，教師としてじっくりと現場で教育実践を深めることとなる。後期は，教育の原点に戻り，教育実践をより深めるなかで臼田校長との出会いが起き，東井義雄のその後の人生を決定づけることになる。この時期は，戦前の自らの戦争協力の反省を踏まえて，学校通信の編集と発行，地域と連携した学校教育の推進，授業論，学力論，後進

の指導等，こうした教育実践が日本の教育界に認められていく時期と言えるだろう。

第三期：教師生活の終了から晩年の講演・執筆活動時代

40年の教師生活を終了し，そこから15年間の講演活動，執筆活動に邁進していく。晩年は仏教への信仰を前面に出す形で，講演や著作を展開して一貫した人間観・世界観・教育観を構築していく。[12)]

第3章　東井義雄の教育思想と教育実践

第1節　『大無量寿経』の「独来独去無一隋者」と出会った東井義雄

「独来独去無一隋者」は東井義雄の根源的思想の特徴の一つである。北島信子によれば，東井は1928（昭和3）年16歳のときに漢文の宿題で，「独来独去無一隋者」の言葉と巡り合う。母を早くに亡くし，父もやがては亡くなってしまい，自分もいつかは一人になってしまうことのさびしさを痛烈に感じていたために東井義雄にとってこの『大無量寿経（だいむりょうじゅきょう）』の「独来独去無一隋者」という文言はひとしお衝撃が強かった。[13)]書き下し文は，「独り来り独り去り，ひとりも随（したが）ふものなけん」[14)]である。これは「独り生まれ来て独り世を去るのであって，何も持って行くことはできない」。[15)]この点について東井義雄は次のように述べている。

「母もたった一人で行ってしまった。臨終の枕辺にむせび泣く者はあったが，一人もついては行かなかった。父もやがてひとりぼっちで行ってしまうのだろう。私もいつかひとりで行かなければならない。世界にはたくさんの人間がひしめきあっているようだが，いざとなったらみんなひとりぼっちなのだ。それを思うとたまらない気がした。みんなみんなが，何の憂いも不安も感じないかのように働き談笑しているのが不思議であった。朝，目がさめると，ああ自分は生きていたと思った。父も祖父も祖母も妹もみんな生きていることを確かめると，ああよかったと思った。が，このしあわせがいつまで続くかと思うとまた不安であった。」[16)]

1918（大正7）年にわずか6歳で母と死別することになり，東井義雄は「独来独去無一隋者」という言葉に「大鉄槌のような重さ」で打ちのめされたという。東井は，「独り生まれ来て独りで死ぬ」「誰も付いていく者はいない」という意味を，上述のような母との別れと重ねて実存的に受け止めていたのだろう。母だけでなく，家族もやがてみんな一人で世を去っていくものだと納得するようになる。

北島によれば，後に父の葬式を出すまでに「六つの葬式を出した」という壮絶な経験を持った若き東井義雄は，世界には大勢の人々が暮らすのに，また家族とともに過ごしているのに，いつかはみんなたった一人ぼっちで死んでいかなければならないことの意味を考えるようになる。すると「いざとなったらみんな一人ぼっち」であり，「そう思うとたまらない気がした」という。まさに東井にとって「きびしい掟」として脳裏に焼き付くこととなる。[17)]

北島信子はこうした省察について東井義雄の以下の文章を的確に引用している。「親や教師がどこどこまでも，ついていってやることができるのなら，それもよかろうが，無常の風は，いつか必ず訪れるのである。それを思うとき，親も教師も，一日も早くこの『独来独去』のきびしい掟に目ざめて，いつどこからでも，子どもが，自分の足で歩いて行けるように，その覚悟で『教育』を考えるべきでなければならないかもしないのだから…。」[18)]

教師や親が子どもにずっと寄り添っていけるならば，常に導いてやることができる。しかし「独来独去」と同様，親も教師も子どもたちも一人で生まれ一人でこの世から去っていかなければならない。だからこそ，東井義雄は真剣に「子どもが自分の足で歩いて行けるように」教育を考えるのである。

東井義雄は『大無量寿経』の「独来独去無一隋者」と出会うことによって，一つの変革的段階を

経ることになる。「独来独去」の意味するところは，究極的には，子どもであっても一人で生まれ，一人で死んでいかなければならない存在であることをわれわれ大人や教師が自覚する必要があるということである。さらに「無一隋者」とは，親も教師も「ずっとついていてやれない」ことを認識しなければならず，それゆえに子どもは自分の足で歩いていけるように教育する必要があると東井は自覚したのである。[19]

第2節　亀は亀として

北島信子によれば，学生時代の東井は運動が苦手でいつもマラソンはビリになっていたため，「亀は亀として」の価値を見出していく。兎にも亀にもともに価値があり，優劣ではなく，それぞれの子どもの存在に価値を見出すことが教育であると実感していく。仏教思想で「青色青光（しょうしきしょこう）　黄色黄光（おうしきおうこう）　赤色赤光（しゃくしきしゃっこう）　白色白光（びゃくしきびゃっこう）」の世界があるという。これは存在のすべてが，それぞれの光を放つという意味であり，この価値観こそ，教育の目指すべき子ども観ではないのかと東井義雄は確信するようになる。[20]

北島信子は，東井の師範学校時代の教育実践の特長を以下のように紹介している。それは「したら，しただけのことはある」という「人生のおきて」を獲得したことである。東井義雄はビリで走るマラソン体験から，一番かビリかではなく「走る存在」そのものに価値があるということを実感したのである。貧しさのゆえに十分な食事をすることができず，東井は体力に自信がなかった。そうした状況で師範学校時代のマラソンではたいてい一番ビリで走った経験を，北島は鋭く指摘し，次の東井の文章を紹介している。

「そういう時，ビリをこちらが引き受けてやるおかげで，仲間はビリの悲哀を味わわないですむのだと思うと，何か『ビリの役割り』とでもいったようなものが感じられて度胸がすわりはじめた。私はこのビリで走るマラソンのおかげで，人生マラソンについて考えさせられるようになった。根気を要するような仕事をしている時，『したら，しただけのことはある』とつぶやくと元気がでるし，たいていの人なら劣等感に耐えられなくなるような状況におかれた時にも『ビリの役割り』を思い出すと度胸がわいてくる。私は『兎と亀』の話は，ただ努力の勝利を教えたものではないのではないかと思う。不断の努力は尊いものではあるが，亀がいくら努力しても兎にはなれない。兎になろうとすることよりも，亀は亀としてりっぱな亀になること，そこには栄光があるのだということを，『兎と亀』の話は，教えてくれているのではないであろうか。仏の世界は，『青色青光，黄色黄光，赤色赤光，白色白光』の世界で，存在のすべてが，それぞれの光を放つ世界だということであるが，この世界こそ，教育の目ざす世界でもあるのではないだろうか。自分はいつでも自分である。他人ではない。世界でただ一人の自分である。ほんものの自分になるよりほかに道のない自分である。」[21]

北島によれば，この文章を通して東井義雄はビリであることを悲しみ，劣等感を抱いているのではない。ビリで走ることに変わりはないが，一足でも走っただけ，帰着点に近づいていると考えて，「したら，しただけのことはある」という人生のおきてをかみしめているのである。自分がビリを引き受けることによって，仲間がビリの悲哀を味わわないで済むと東井義雄は考えたのである。亀は努力しても兎にはなれない，という東井の考えは，けっして優劣や諦観を述べたものではない。兎の方が優れて亀は劣っているという価値観ではなく，兎にも亀にもともに同じ価値があるということであり，様々な子どもの中にそれぞれの価値を見出していくのが教育の仕事であるという東井義雄の信念でもある。それはまた仏教思想の「青色青光，黄色黄光，赤色赤光，白色白光」の世界で，存在のすべてが，それぞれの光を放つ世界と重なるのである。[22]

第3節　生かされている自分への覚醒…「口蓋垂」（のどびこ）事件

これもまた極めて有名な東井義雄25歳の時のエピソードである。当時，東井は高等小学校の教師で学級担任をしているときにその事件が起きたというのである。三学期の授業が終わって，何か質問はないかと東井が子どもたちに問いかけたときに，決定的な出来事が起きたのである。北村君という子どもが手を挙げて「あーと口を開けると，喉の奥に，ベロッとさがった，ぶさいくなものが見えていますが，あれ，なにするもんですか？」と東井に問うたというのである。東井は即答ができなかったために，率直に「北村君，すまんけど先生知らんわい。今日，帰って調べて来るからな，明日まで待ってくれや。」と率直に返事をしてその晩，「のどびこ」の働きを調べることとなった。そこで次の事実がようやくわかり，東井はある種の感動を味わうことになる。[23]

鼻から吸った息が肺にいく気管の道と，口から入った食べ物が胃袋へいく食道の道とに喉のところで，道が二つに分岐している。食物がまちがえて気管の方へいくと最悪，窒息して死んでしまう。そういうことが起こらないように，「のどびこ」（口蓋垂・こうがいすい）がぴったりと気管の入口に蓋をしてくれるおかげで，まちがいなく食物が胃袋に入るということが分かった時に，東井は「殴りつけられたような気がした」と記している。[24]

正式名は「口蓋垂」（こうがいすい）というのだが，この「のどびこ」は，生まれたときから働きづめに働いてくれているのに，東井自身も「ご苦労さんやなあ」と思ったことは一度もなかったと自身の傲慢さに気付いたいう。東井は，同様のことは，他の諸器官についても言えることを認識したのである。眼でいえば，眼のおかげで外界のものが見え，耳のおかげで外界の音が聞こえるのである。息が出たり入ったりしているが，これが止まったら人間の生存は終わりを迎える。夜も昼も日曜でさえも，一生懸命に，諸器官は私のために働いてくれていることを深く理解した東井は，この事件以降，「どうか，生きるということを，粗末にするな，しっかり生きてくれよ」と子どもたちに，生命尊重の視点を意識的に働きかけるようになる。[25]

北島によれば，東井義雄は戦時中，一時期であるが無神論的立場をとるようになった。貧しい農村の現状のなかで，自分の家の状況（浄土真宗の寺として，貧しい村人からお供えをさせる）に対して反感を持っていたのであるが，この「のどびこ」(口蓋垂)事件を契機に再び，いのちの本質的な意味に目ざめ，人間とは自分も学級の子どもも含めてすべての人間が「生かされている」存在であることを再発見していくのである。北島は中村薫の『正信偈（しょうしんげ）62講』を援用しつつ，「凡」も「聖」も「逆」も「謗」も斉しくだきとらずにはおかないという考え方は，「正信偈」の「凡聖逆謗斉廻人」（ぼんじょうぎゃくほうさいえにゅう）の箇所であり，「五逆の罪人」も「南無阿弥陀仏」と念仏を称えるだけで，等しく救われることを意味する，と鋭く指摘している。[26]

第4節　長女迪代（みち）が3歳で難病にかかる体験をした東井義雄

東井義雄はさらには愛娘の迪代（みち）の大病，父の死の体験によって，浄土真宗の「生かされている」自覚をより深くしていくのであるが，本節では，長女が3歳で難病にかかった時の東井義雄29歳の父親としての辛い経験を特に紹介してみたい。今井伸和によれば，「口蓋垂」の体験の後，東井の長女が3歳で難病にかかり，医者からは「百人の中九十九人は助からない」「もう今夜一晩むずかしいでしょう」と宣告されるほどの切羽詰った状況で，東井が娘の迪代（みち）を看病したときに綴った詩を紹介している。1941（昭和16）年9月5日の夜半零時に作られた詩である。[27]

「前略
迪代（みち）／わたしはお前のとうちゃんでおりたい。／身のほどしらずの／ねがいであろうか。
○

中略
みち／お前は　生かされている。／ああ／もう一時間で／夜が明ける。

○

ああ／きょうも／親子でおらせてもらった。

○

みちよ／お前は「私」の子ではなかった。／お前のいのちは／とうちゃんなんぞの力で／どうにかなるようなものではなかった。／みちよ／それだのに　とうちゃんは／お前を「私」の子だなんて思いすごしていた。／みちよ，／とうちゃんは／今こそお前の「いのち」を拝む。／そして教室の六十人のいのちを拝む。」[28]

今井伸和の指摘によれば，一命を取り留めた長女の命に対して，東井は，子どもがそこにいることのあたりまえの有難さを深く自覚したという。死ぬかもしれない「いのち」がそこに存在することへの感謝の念である。そしてこの自覚が教室の六十人の「いのち」の自覚へとつながっていったのである。こうした経験を踏まえて東井は言う。「こうして，私は，受持ちの子らへの愛によってでなく，私の子どもへの愛によって，生きているということのただごとでなさを，否応なしに痛感させられた。そして，このことを通じ，受持ちの子らのいのちのただごとでなさに気づかされた。」[29]

今井に従えば，自己の「いのち」のただごとでなさの自覚と，他者の「いのち」のただごとでなさの自覚とは，自覚の深化の度合いに応じて区別して論じられるべきであるという。「みちよ／お前は「私」の子ではなかった。／お前のいのちは／」の詩の一節から理解できることは，「わたしの子」から「お前は『私』の子ではなかった」と東井によって受け取りなおされていることである。カギ括弧付きの「私」が意味することは，たとえ親子の関係にあっても，子どものいのちを思い通りにすること，私物化することはできないという厳粛な事実である。東井にとって，長女の大病の経験を通じて，「いのち」の差配不可能性が自覚されたということである。換言すれば，各人が生きているという事実を一般的に「いのち」と呼ぶが，その背後に私たちの個別の「いのち」を支え生かしている存在もまた東井は「いのち」と名づけたのである。「『私』というものの背後，『私』というものの根底にあって，『私』というものをあらしめている大いなるもののはたらき」[30]と東井は述べている。今井は，大いなるいのちのおかげで個々の私たちのいのちが生かされていると捉え，前者を「いのち」の超越的側面，後者を「いのち」の内在的側面と定義づけている。[31]

さらに山田邦男によれば，東井義雄は娘さんの大病を通して，「生きていることのただごとでなさ」を知らされ，その辛い自らの経験を通じて一人ひとりの子どもの背後に親の深い愛情が存在し，子どもはその親によって「祈られている」ことを深く身をもって知るに至ったのである。これが東井の「教室六十人の命を拝む」原点となるのである。[32]

註

1）顕彰会事務局，福田静剛，西垣勉編集，東井義雄遺徳顕彰会，『東井義雄の生涯』，1994年，29頁参照。および菅原稔編集・解説，『現代国語教育論集成・東井義雄』，明治図書，1991年，423頁参照。
2）顕彰会事務局，福田静剛，西垣勉編集，『東井義雄の生涯』，4～29頁参照。
3）「東井義雄年譜」（制作協力＝宇治田透玄・東井義雄記念館長），山田邦男他編著，『ことばの花束』，佼成出版会，2002年。
4）菅原稔編集・解説，「付録：東井義雄略年譜・主要著作目録」『現代国語教育論集成・東井義雄』，明治図書，1991年，423～433頁参照。
5）朝日新聞社編，「現代人物事典」（1977年版）中野光著，「東井義雄」，889頁参照。
6）朝日新聞社編，前掲書，889頁参照。
7）朝日新聞社編，前掲書，889頁参照。
8）菅原稔著，「1章　人と業績」，菅原稔編集・解説，『現代国語教育論集成・東井義雄』，10頁参照。
9）古家佳美著，「東井義雄の教育実践の思想的基盤についての考察－宗教思想との関連を中心として－」，

滋賀大学大学院教育学研究科研究論文集，第13号，2010年。
10）古家佳美著，前掲書，22頁参照。
11）古家佳美著，前掲書，22頁参照。
12）古家佳美著，前掲書，23頁参照。
13）北島信子著，「東井義雄の教育思想における浄土真宗の教え」，真宗高田派正泉寺，北島義信編，『浄土真宗と社会・政治』リーラー「遊」Vol. 4，図書出版文理閣，2006年，104～105頁参照。
14）浄土真宗本願寺派，『浄土真宗聖典』，本願寺出版社，1988年，82頁。in：北島信子著，前掲書，104頁参照。
15）浄土真宗聖典編集委員会，『浄土真宗聖典　浄土三部経－現代語訳－』，本願寺出版社，1996年，117頁。in：北島信子著，前掲書，104頁参照。
16）東井義雄著，「わが心の自叙伝」『東井義雄著作集7』，明治図書，1973年，341頁。（初出『のじぎく文庫』神戸新聞社，1957年）in：北島信子著，前掲書，105頁参照。
17）北島信子著，前掲書，105頁参照。
18）東井義雄著，「わが心の自叙伝」，341頁。in：北島信子著，前掲書，105頁参照。
19）北島信子著，前掲書，104～105頁参照。および古家佳美著，前掲書，30頁参照。
20）北島信子著，前掲書，107頁参照。
21）東井義雄著，「わが心の自叙伝」『東井義雄著作集7』，338頁。in：北島信子著，前掲書，107頁参照。
22）北島信子著，前掲書，107～108頁参照。
23）東井義雄著，『ばかにはなるまい』，（同朋叢書6），真宗大谷派岡崎教区出版委員会，2010年，69頁参照。
24）東井義雄著，前掲書，69～70頁参照。
25）東井義雄著，前掲書，70頁参照。
26）中村薫著，『正信偈62講』，法蔵館，1999年，90頁参照。in：北島信子著，前掲書，110頁参照。
27）今井伸和著，「子どものいのちにふれる－東井義雄の教育論－」，日本道徳教育学会編，『道徳と教育』，50巻，2006年。23頁参照。　長女の大病およびそのときの東井義雄の心情を綴った詩に関する指摘は今井の他にも，菅原稔著，「1章　人と業績」，前掲書，11頁でも触れられている。
28）東井義雄著，『いのちの芽を育てる』，柏樹社，1979年，68～70頁。in：今井伸和著，前掲書，23頁参照。
29）東井義雄著，『東井義雄著作集1』，214頁。in：今井伸和著，前掲書，23頁参照。
30）東井義雄著，『根を養えば樹は自ら育つ』，柏樹社，1976年，57頁。in：今井伸和著，前掲書，24頁参照。
31）今井伸和著，前掲書，25頁参照。
32）山田邦男著，「東井義雄のこころ」，山田邦男他編著，『ことばの花束』，26頁参照。